

秦隸に学ぶ四作

澤田雅弘

Masahiro Sawada

書作は年一回、夏の休暇期間に時間をつくって書く。今年は九月一日から三日、午前十時から午後四時までこれに充て、晩はのんびり過ごした。以前は夜中まで書いたが、近年はその氣勢を抑えて気を保養することにし、今年はさらに枚数も多く書かないと自身に言い聞かせた。

書作に臨んでは、いつも逸る気持ちを制する目的と、感興を呼び覚ますために臨書する。今年は前日の五時間ほどをそれに充てた。手にしたのは、今年購入した人民美術出版社新刊の北京大学出土文献研究所編『北京大学藏秦代簡牘書迹選粹』。同書は臨書向けに編集された人民美術出土簡帛書法芸術叢書の一つで、『北京大学藏西汉竹簡書墨迹選粹』の続刊である。同叢書第一冊の西漢竹簡の方は、原寸大と拡大とをカラー印刷したのだが、撮影が悪いのか印刷過程がわるいのか、原寸大はともかく拡大した方は筆画に立体感がなく墨色も短調で臨書したいと思わない。しかし秦代簡牘の方は、改

善を図ったのか、そもそも撮影目的が異なっていたのか、原寸大のカラー図版に赤外線撮影したモノクロ拡大を併載し、筆を執りたい衝動に駆られる。

最近の一番の興味の対象は秦隸ないし前漢初期の隸書。といっても随時筆を執ることのできる状況ではないので、新刊が届いたり新着の「文物」誌などに掲載される図版を眺めたり、せいぜい二、三十字鉛筆で写したりするだけである。ただ唯一の救いは、オープンカレッジ（実技）を受講くださったっている方のなかに、虎溪山前漢簡（二玄社『簡牘名蹟選2』収録）などをお持ちになる数名がおられ、定期的に半紙数枚を書く機会が持てることである。

このような次第で、三日間に書いた四点はすべて、結果的に秦隸ないし前漢隸を頭においたものになった。しかし、どれも草稿段階で集字はしていない。紙はすべて紅星牌棉料単宣、墨は呉竹「抱雲」の磨墨液。

*

「容乃公」 容るれば乃ち公。全紙二分の一。筆は数枚書いたところで、二回りほど大きい邵芝巖製の一一・八×二・二cmの無銘羊毫筆に替えた。『老子』第十六章「知常容、容乃公、公乃王、王乃天、天乃道、道乃久、没身不殆。」から採った。しり取り式に展開する一段で、「容」「公」は韻をなし、面白い。「公」への帰着は傾聴させるが、その後に「王」の条件に発展するのは興ざめなので、「公」までに留めたいと思った。「容乃公」の三字は、今次数か月前から通勤などで読書してことばを探索したときに目に留まった。そのとき平成四年ころにノートに採り正方形に構成するラフ書きをした記憶がよみがえった。当時、念頭に置いたのは漢簡だったが、今次の構成と基本的には変わらない。当時はとも仕上げる自信がなく、挑戦したことは一度もなかった。今次も正方形の紙形を予備の一つに用意してはいたものの、この三字を積極的に書こうとは思わなかった。しかし、ふと気分転換に一枚書いてみて、気持ちに乗った。書き出した当初は、筆をもう少し動かしていた。その気配は「乃」に残っている。平成四年ころ念頭に置いていた漢簡がふと顔を出したのかもしれない。今次とくに秦隸に拠ろうと意図したわけではないが、なんとなく漢簡の匂いが付くことが嫌に思えて、抑揚を控えようと努めた。その意味では「乃」の末筆の運動にやや不満がない

わけではないが、その後に書いた数枚よりも明るく、秦隸の做書が目的ではないのだからと思いついて、これを残すことにした。

「尊聞」 聞くを尊ぶ。全紙三分の一。筆は仿古堂製と聞く宿淨羊毫九×一・八cmの無銘筆。旧知の百扇堂主人から随分むかしに購入したものである。曾子の君子論のひとつ「君子尊其所聞、則高明矣。行其所聞、則光大矣。高明光大、不在於他、在加之志而已矣。」から採った。『大戴礼記』曾子疾病に録され、『前漢書』董仲舒伝にも引用される。

これも予備のつもりでいたものだが、最初になんとなくこのラフ書きを手にした。さしたる苦勞もなく書けるのではないか、そう思ったからだ。今次の四件のなかで一番苦勞した。草稿の門構えは選んだ一枚と大差ないが、書き出した当初は筆を盛んに動かしてできる渴筆の面白さに走ってしまい、その非に気付けないまま十枚ほど書いた。非を覚ってからも、十年ほど前に「多聞」を書いたときの手の記憶を払拭できそうにないので、翌朝改めて書くことにした。残したのは前日の非を幾分正せた際の一枚である。その後にも五、六枚書き、漸く運動は鎮静化した。それらは逆に硬く映るのと初々しさも消えたので、残さなかった。

「久視」 半切八分の一。筆は善璉湖製の羊毫筆「滄海 大」。

『老子』第五十九章「有国之母、可以長久。是謂根深固蒂、長生久

視之道。」から採った。「久視」の視は活（莊子高誘注）であるから、「長生」と同義で長生きの意。「長生久視」は『荀子』『呂氏春秋』にも見える戦国期の通行語であるので、「長生久視」の四字でもよかつたが、「長生」二字は生で面白くない。また、「長生」を省くと「久視」は長くじつと注視する意にも見える。その面白さが興を後押しした。これも最初に選んだことばではない。当初は学生に贈りたいことを数件用意していて、数枚ずつ試みたが、筆を描くまでの残り時間が二時間になっていたの、仕上がりが予測できそうなのでこれに切り替えた。今わたしは草稿を念入りに作らない。大学生のころ草稿を作るものと教わって、念入りに作ろうとした時期があるが、どれも念を入れたものほどうまくいかなかった。筆を執った際に草稿時の計画に縛られて気持ちが解放されないからだろうと思う。とにかく性に合わないと思うようになってからは、大抵は落書き程度のラフ書きで気持ちが乗るかどうかが、迷いがなさを測るだけである。「久視」はとくに手間をかけなかった。縦書と横書をそれぞれ一度鉛筆で落書きしただけでいけると思った。筆を執っても何ひとつ悩まずに気持ちよく書けた。見部の足の起筆位置を目の右下角にずらすことで現れる愛らしい表情は、臨書を通じて覚えたものである。

「復朴」 朴に復る。半切八分の一。筆は「久視」同様、善璉湖製

の羊毫筆「滄海 大」。『莊子』内篇応帝王の「彫琢復朴」から採った。本学で担当している「書論講読」の授業の私製テキストに、「彫琢復朴」を踏まえた書論も講義をしていて、ふと書いてみようと思いついた。これもいま草稿ノートを見てみると、鉛筆で横書を数回ラフ書きして終えてあるが、その隅に復字だけを七回あれこれ体を変えて書いてある。全て秦から前漢初期を念頭においてある。木偏の縦画だけには篆書色を濃厚に残すことだけは決めて臨んだが、一二枚書いてから、朴の縦画二本をどうしたものかと思いだした。草稿では長さを揃えてあったが、変えることにし、その他はその時々々に任せた。

*

「久視」「復朴」ほどの小品なら、筆画を簡素にとの思いは貫けるが、「尊聞」や「容乃公」ほどになると、紙面に変化を求めたくなるのか、思いに反して呼吸の変化が増幅して現れ、簡素で敦厚の風趣から遠ざかってしまう。むかし好んで臨書した躍動する漢簡の筆画が、ふと手を突いて出るのを抑制しきれなかったことに、幾分の不満がある。その意味では、まだ「久視」がいま思うところを具現しているように思えるが、その分、逸趣に欠ける憾みなしとしない。残したこの四作にはどれも愛着があるが、就中、「容乃公」の一枚は、積年の思いを果たした意味でたいそう愛しい。



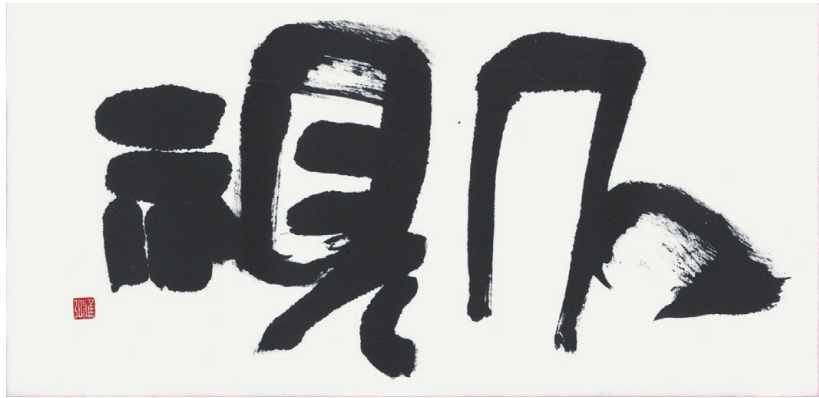
容乃公

70×68cm



尊聞

45.4 × 70cm



久視

17.5×34.1cm



復朴

17.5×34.1cm